世界名作劇場

小公女セーラ

プリンセス

『夏休みの大騒動』(仮)

第 28 話

制 作　日本アニメーション
　　　　フ ジ テ レ ビ

脚本中西隆三

登場キャラクター（第二十八話「夏休みの大騒動」）

セーラ・クルー
ミンチン院長
アメリア先生
ベッキー
ピーター
アーメンガード
ロッティ
ラビニア
ジェシー
ガートルード

モリー

ジェームス

（アーメンガードの父親）

（ロッティの父親）

（ラビニアの母親）

エミリー（人形）

シーザー（猫）

メル（ネズミ）

1 ミンチン女学院・二階の廊下

嬌声ではしゃぐ女生徒たち――

――外出帽子ではね廻るスーザン。

――自室のドアを出入りするジェイン。

――出窓で外を見て騒ぐドルシラ、ジェニファ、リンダ、クリステル、ダイアナ。

――スキップするペネラピ、ジェイン。

階段を慌ただしく駆け上って来るアメリア――

アメリア「皆さあん！……お父様やお母様は、間もなく、お迎えに見えますよウ！……早くお支度をすませるんですよウ！」

女生徒たち「はあい……！」

2 同・台所

ジェームスが、大鍋を洗い場に投げ込み、

ジェームス「ふウッ、終った、終った……これで、当分、厄介なお嬢方のメシ作りともおさらばって訳だ」

モリーも汗を拭い――

モリー「全くだねえ、これで、あたしたちも夏休みがたのしめるよ」

そこへ、セーラとベッキーが、食器の山を下げて来る―

――

ジェームス「とは云っても、お前たち二人にゃ、夏休みなんて、洒落れたもんはねえんだから、そのつもりでいなよ」

セーラ「は、はい……」

モリー「ちょっと、生徒さんたちの靴は、磨いてあるだろうね」

セーラ「はい、今朝早く起きて、ベッキーと一緒に」

ベッキー「これから、お部屋に届ける所です」

モリー「グズグズしてるんじゃないよ。今日は、生徒さん達の親御さんが見えるんで、院長先生は、ピリピリしてらっしゃるんだ

　　からね」
セーラ「はい……」

3
同・地下の作業場

作業台の上に並んだ磨き終った女生徒たちの靴、靴、靴
――
入って来たセーラとベッキー、急いで前掛けに靴を受け
始める――

4
同・二階の階段

それぞれ前掛けに、靴、靴、靴を受けて運んで上って来
るセーラとベッキー。

5

同・アーメンガードたちの部屋

開いたドアの中で—— 来ているラビニアが、ジェシー、ガートルードたちに自慢話をしている。

ラビニア「馬鹿ねえ！ 私、アメリカなんかに帰りはしないわ。だって、折角の夏休みに何十日も船で往復するなんて、無駄なだけよ！」

ガートルード「へええ……だけど、ラビニア、おうちへ帰らないで、夏休み、一体どこで過す気？」

ラビニア「フフ、私ね、お母様が迎えに来たら、一緒にヨーロッパ旅行する事になってるの」

ジェシー「ええええッ、ヨーロッパ旅行？」

ラビニア「そうよ……スイスから、ウイーン、それからライン河も下るつもりだわ」

ジェシー「すッごォーい！」

ガートルード「さすが、お金持ィ！」
二人の嘆声に、満足気に笑ったラビニア、ふっと戸口を振り返る――
ドア外に、前掛けに靴を受けたセーラが立っている。
ラビニア「まあ……あなた、私たちの話、立聞きしてたの？」
セーラ、首を振る――
セーラ「靴を……届けに来ただけよ」
ラビニア「フン……遅かったじゃないの」
近づくと自分の靴を前掛けから掴み出し点検する。フッと吹いて、
ラビニア「まあまあの磨き方ね。勘弁しとくわ」
ジェシーとガートルードも、近づくと自分の靴をとり、フッ、フッと真似して靴を吹き、検べる。
ジェシー「まあまあね」
ガートルード「勘弁しとくわ」

どっと笑う三人――

アーメンガードが近づき、最後の一足を受け取る――

アーメンガード「有難う、セーラ」

ラビニア「所で、セーラ、夏休みは、どこへ帰るの?」

セーラ「えっ……帰るって……私が?」

ラビニア、オーバーに気づいてみせる。

ラビニア「あーァ、そおだったわねえ……あなたには、帰る処も、迎えに来る両親も、いないんだったわねえ、忘れてたわ、失礼!」

どっと笑う三人――

セーラ、じっと見返す――

セーラ「云う事がそれだけなら、戻るわ」

セーラ、引返そうとする。

ラビニア「待ちなさいよ!」

セーラ、静かに振返る――

ラビニア「あんたには、やって貰う仕事があるわ……来て！」
ラビニア、セーラをすり抜けてドアを出る——　見送って続くセーラ。
顔を見合せるジェシー、ガートルードと、不安気に取残されるアーメンガード。

6　同・特別奇宿生室

入って来るラビニア、続いて入って来たセーラに一隅を促す——
——置かれている大ぶりな二つの旅行鞄。
ラビニア「下へ運んで頂戴……！」
セーラ、ラビニアを見返す——
ラビニア「メイドの役目でしょ。運ぶのよ！」
セーラ、無言で旅行鞄に近づくと、間に入り、左右に持

上げようとする――が、重い。

ラビニア「なにをしてるのよ」

セーラ、息を吸うと歯を喰いしばって、持上げようとする――微かに上る鞄。

ラビニア「（冷笑）急いで！」

傍の外出用の帽子をとる――

7 同・三階廊下

出て来るラビニアと――そのあとから必死に左右に旅行鞄を下げて出て来るセーラ。

8 同・二階の廊下

ドアから出たジェシー、ガートルード、アーメンガード

以下外出姿の女生徒たちが、バスケットや小さなスーツケースを手に、片唾を呑んで、三階への階段を見上げている――

× × ×

降りて来る帽子のラビニア―― 踊り場でふり返る。

重い旅行鞄を左右に、引きずるようにやっと提げて一歩一歩降りて来るセーラ。

ラビニア「早くして！（先に立つ）」

セーラ、踊り場からよろめく――

× × ×

アーメンガード「セーラ！」

ロッティ「セーラ・ママ！」

× × ×

ベッキー「お嬢様！……」

突然、女生徒たちの中から飛び出すベッキー、階段踊り

場へ駆け上る。

ベッキー「私が……私がお持ちします！」

ベッキー、急いで、鞄のひとつをとる。

セーラ「あ、有難う、ベッキー」

ラビニア、フンと二人を見返ったが、見守るジェシーたちに、

ラビニア「行くわよ！」

先に立って一階へ降りて行く──続くジェシー、ガートルード、女生徒たち。

9　同・表

──ヒヒーンと馬のいななき。

──重なり合って停っている迎えの辻馬車、辻馬車、辻馬車。

——更に、また一台が到着する。

10 同

狭い廊下で——迎えに来た両親たちと女生徒たちがごった返している。

× × ×

愛想を振りまくミンチン——

× × ×

忙がしく間を縫うアメリア——

× × ×

小男の父親の腕にすがるロッティ——

× × ×

アメリアと、例の派手な母親——

× × ×

むっつりした父親と、アーメンガード。

廊下の手前で、じっとその様子を見守っているセーラと

――ベッキー。

×　　×　　×

ベッキー「お嬢様……」

セーラ「え……（振向く）」

ベッキー「もう、用事はございませんでしょう……下へ戻りましょう」

セーラ「え、ええ……」

セーラ、ベッキーに促されて、そっと地下への階段へ引

返す――

11	同・地下の食器洗場

入って来るセーラと、ベッキー――

ベッキー「ご、ごめんなさい、お嬢様……」

セーラ、怪訝に顔をあげ、ベッキーを見る――

ベッキー「ここへ戻ろうなんて……私……お嬢様に命令みたいなこと云ってしまいまして……」

セーラ、じっとベッキーを見る。

ベッキー「でも……私、たまらなかったんです……お嬢様に……あんな場面をお見せしてる事が……」

セーラ「ベッキー……」

ベッキー「どの生徒さんにだって、みなさん、お父様や、お母様が、お迎えに見えてます……それなのに……お嬢様だけが、嬉しそうな皆さんの様子を見ているだけだなんて……お嬢様が、あんまり、お可哀想すぎます……」

ベッキーの眼から、涙が溢れている。

セーラ「有難う、ベッキー……でも、もう心配しないでいいのよ……私、お父様がいない事には、もう馴れたつもりなの」

ベッキー「そんな……お嬢様……」

セーラ「ベッキー……私に、お父様がいなくなった事は、誰のせいでもない私の運命なのよ……運命は、受入れるしかないのよ」
ベッキー「お嬢様……！」
その時、表に、馬のいななき――

12 同・表

いななく馬車の馬――
『先生、さようならァ！』
『アメリア先生、ごきげんよう！』
と、女生徒たちの声がかぶる――
集っていた辻馬車が、一台―― また一台と出発して行く――

13 同・地下の食器洗場

ふっと表の方を窺うセーラとベッキー。

ベッキー「皆さん、帰って行かれるんですわ」

セーラ「え、ええ……」

14 同・表

『先生、さようならァ！』

声を残して、走り出て行く馬車――　また一台――

15 同・地下の食器洗場

じっと表の気配を想っているセーラとベッキー。

突然、一方のドアが開き、アーメンガードとロッティが飛び込んで来る。

アーメンガード「セーラ！」

ロッティ「セーラ・ママ！」
驚いて振返るセーラ——
セーラ「アーメンガードに、ロッティ！」
アーメンガード「私、探したのよ、あなたが急にいなくなってしまったので」
ロッティ「そうよ、探したのよ」
セーラ「どうしたの、一体」
アーメンガード「だって、あなたにお別れしてからでなきゃ、私、帰れないもの」
セーラ「アーメンガード……」
アーメンガード「ね、セーラ……私、あなたとお別れするの、とてもつらいの」
ロッティ「私だってよ、セーラ・ママ！」
アーメンガード「でも……夏休みなんて、きっとすぐ終るわね」
セーラ「そうよ、アーメンガード」

セーラ、怪訝に顔をあげ、ベッキーを見る――

ベッキー「ここへ戻ろうなんて……私……お嬢様に命令みたいなこと云ってしまいまして……」

セーラ、じっとベッキーを見る。

ベッキー「でも……私、たまらなかったんです……お嬢様に……あんな場面をお見せしてる事が……」

セーラ「ベッキー……」

ベッキー「どの生徒さんにだって、みなさん、お父様や、お母様が、お迎えに見えてます……それなのに……お嬢様だけが、嬉しそうな皆さんの様子を見ているだけだなんて……お嬢様が、あんまり、お可哀想すぎます……」

ベッキーの眼から、涙が溢れている。

セーラ「有難う、ベッキー……でも、もう心配しないでいいのよ……私、お父様がいない事には、もう馴れたつもりなの」

ベッキー「そんな……お嬢様……」

セーラ「ベッキー……私に、お父様がいなくなった事は、誰のせいでもない私の運命なのよ……運命は、受入れるしかないのよ」

ベッキー「お嬢様……！」

その時、表に、馬のいななき――

12 同・表

いななく馬車の馬――

『先生、さようならァ！』

『アメリア先生、ごきげんよう！』

と、女生徒たちの声がかぶる――

集っていた辻馬車が、一台――また一台と出発して行く――

13 同・地下の食器洗場

ふっと表の方を窺うセーラとベッキー。

ベッキー「皆さん、帰って行かれるんですわ」

セーラ「え、ええ……」

14 同・表

『先生、さようならァ！』

声を残して、走り出て行く馬車——　また一台——

15 同・地下の食器洗場

じっと表の気配を想っているセーラとベッキー。

突然、一方のドアが開き、アーメンガードとロッティが飛び込んで来る。

アーメンガード「セーラ！」

ロッティ「セーラ・ママ！」

驚いて振返るセーラ――

セーラ「アーメンガードに、ロッティ！」

アーメンガード「私、探したのよ、あなたが急にいなくなってしまったので」

ロッティ「そうよ、探したのよ」

セーラ「どうしたの、一体」

アーメンガード「だって、あなたにお別れしてからでなきゃ、私、帰れないもの」

セーラ「アーメンガード……」

アーメンガード「ね、セーラ……私、あなたとお別れするの、とてもつらいの」

ロッティ「私だってよ、セーラ・ママ！」

アーメンガード「でも……夏休みなんて、きっとすぐ終るわね」

セーラ「そうよ、アーメンガード」

アーメンガード「そして、またすぐ、あなたに逢えるわねえ」
セーラ「もちろんよ……さ、お父様たちがお待ちよ！　行かなくては……」

16　同・使用人階段の下

出て来るセーラ、アーメンガード、ロッティと――続くベッキー

17　同・表

上って来るセーラたち――
アーメンガード「じゃ、お元気でね、セーラ」
セーラ「ありがとう、アーメンガード……」
ロッティ「さようなら、セーラ・ママ」

セーラ「元気でいるのよ、ロッティ」

アーメンガードとロッティ、二台だけ残っている辻馬車に行く。待っていたそれぞれの父親と乗り込むと、走り出す――

手を振って見送るセーラ――

二台の馬車が遠くなって行く――

（中　C　M）

18

同・教　室

ガランとした机を拭くセーラと、床にモップをかけるベッキー――掃除が終り、ほっと見廻す。

ベッキー「ほんとに、先刻までに較べると、嘘みたいに静かになってしまいましたですねえ」

セーラ「ええ……なんだか、淋しくなってしまったわね」

ベッキー、はっとセーラを見る。

じっと窓外を見つめているセーラ。

セーラ「でも……私には、行く所はないんですもの……ここで頑張らなくては……」

ベッキー「お嬢様！……淋しいだなんて……この私がおりますです」

セーラ、振向いて微笑する。

セーラ「有難う、ベッキー……」

その時、廊下でモリーの呼ぶ声――

モリーの声「セーラ！……セーラ！」
セーラ「はあい！」

セーラ、急いで出て行く——

モップを持って続くベッキー——

開けっ放しになったドアから、のっそりとシーザーが入って来る—— 無人の教室を見廻し、ひょいと教卓の上に飛び乗り、大あくびする。

19 同・台所

セーラに、買物のメモを渡すジェームス。

ジェームス「買物はそれだけだ……」
セーラ「はい、ジェームスさん……」
ジェームス「生徒さんたちがいなくなったから、その分軽くなって楽な筈だぜ」

モリー「それから、明日から生徒さんたちのシーツからなにから、大洗濯させるからね。棒石ケンを買って来ておくれ」

セーラ「はい、モリーさん」

モリー「（金を渡し）いいかい、インチキな石ケンを掴まされないよう、よく選んで来るんだよ」

セーラ「は、はい……」

戸口から、ベッキーが近づく。

ベッキー「あのォ……私もセーラさんと一緒に参ってはいけないでしょうか」

モリー「なんだって？」

ベッキー「い、いいえ、あの、セーラさん一人では、インチキを掴まされるといけないですから……」

モリー「フン、なんとか云って……二人で遊びに出ようったって、そうはいかないからね」

ジェームス「ま、いいじゃねえか、今ン所仕事もねえんだ。出してやり

なよ」

ベッキー「うわあ！　あ、有難うございます！」

セーラ「べ、ベッキー！」

20　同・表

使用人階段を上って来るセーラと、いそいそと買物籠を抱えたベッキー――

ベッキー「ほんとに、お嬢様と買物に参れるなんて、こんな嬉しい事はありませんです」

セーラ「（微笑）私もよ、ベッキー……さ、行きましょう」

ベッキー「はい、お嬢様……！」

21　街路

表通りを急ぐセーラとベッキー――

夏の陽差し――撤水車が通る。その後ろから水浴して
はしゃぎ続く子供たち。

×　　　　×　　　　×

来るセーラとベッキー――
ベッキー、暑そうに空を仰ぐ。
ベッキー「暑いですねえ、お嬢様……」
セーラ「ええ……」
ふと、夏帽子をかぶった婦人と子供が通り過ぎる。
ベッキー「（見やって）お嬢様……あんな夏帽子があると、いいです
ねえ」
セーラ「（微笑）我慢するのよ、ベッキー」
ベッキー「はいはい、判ってますとも、お嬢様……」
二人、道を急ぐ――

22

ミンチン女学院・三階の廊下

開いているアメリアの部屋から紙包みの潰れた夏帽子(ストローハット)を摑んだミンチンが出て来る――

ミンチン「アメリア！……アメリア……！」

階段から、クズ篭を抱えたアメリアが上って来る。

アメリア「はい、お姉様……」

ミンチン「なんです、こんなものをベッドの下に押し込んだりしといて」

紙包みから、古びた夏帽子を摑み出す。

アメリア「あ、それは、捨てようと思って……」

ミンチン「（ジロリ）まあ、なんて、勿体ない事を……」

アメリア「でも、昨年の流行ですし、実はもう新しい帽子を買ってしまったので……」

ミンチン「呆れた……ま、仕方ないでしょう。夏休み位、お部屋の整理をなさい！」

帽子を押しつける。

アメリア「は、はい、お姉様……」
ミンチン、階段を降りて行く――
見送ったアメリア、ほっと息をつくと、手にした帽子を見直す――

23

コベント・ガーデン市場の一角

荷車の傍で、ピーターとセーラ、ベッキー――

ピーター「へえぇ、夏休みですかあ……じゃ、お嬢さんもこれで楽が出来ますね」
セーラ「そうは行かないわ。これから、みんなの部屋の大掃除があるし、洗濯物も山ほどあるし……」
ベッキー「そうですとも」
ピーター「成程、お互いに、夏休みなんて、関係なしってとこかあ……おっと、棒石けんでしたっけね。石ケン屋なら、知って

る店がありますよ。行きましょう」

セーラ「有難う、ピーター」

24 露店市の外れ

屋台に並んだ種々雑多な石ケンの山。
セーラ、ピーターと来ているベッキーが手にした棒石ケンの匂いを嗅ぎ、コンコンと硬さを確かめてみる。
離れて、ジロリと見る石ケン屋の主人。

ピーター「お、おい、なにしてんだよ、ベッキー」

ベッキー「シッ……気をつけないと、すぐに水に解けちまう奴を売りつけられちゃいますからね」

ピーター「え？」

ベッキー「田舎のお婆ちゃんに教わったんです……大丈夫、これなら合格です」

セーラ「まあ……」

啞然とピーターと顔を見合せ、微笑する。

25

ミンチン女学院・院長室（夕景）

デスクで帳簿を確めつつ吐息するミンチン——振返る。

ミンチン「アメリア……」

一方で、古い夏帽子を拭いていたアメリアが、はっと顔を向ける。

アメリア「はい、お姉様……」

ミンチン「矢張り、学院の経費がかかりすぎています。なんとか節約しなくては……」

アメリア「は、はい……新学期から、なるべく切りつめるように致しますわ」

ミンチン「それでは、遅過ぎます」

アメリア「え……？」

ミンチン「まず第一に……」

ミンチン、立上ると腕を組んで歩き廻る。

ミンチン「夏休みで、生徒たちがいないのに、メイドが二人もいるなんて、不経済です」

アメリア「で、でも……」

ミンチン「一人は、はぶく事が出来ます……そうすれば、その分食費も助かる筈です」

アメリア「お、お姉様……」

ミンチン「第二……」

26 同・台所（夜）

セーラとベッキーに、それぞれ粗末な食事の盆を渡すモリーとジェームス――

モリー「いいかい、今日から、生徒さんたちのお給仕をしなくてすむんだから、院長先生方のお給仕は、お前さんたちの仕事にしたからね」

セーラ「はい、モリーさん」

27

同・一階廊下（夜）

その盆を運んで来るセーラとベッキー。

セーラ、院長室の前で、ノックする。

セーラ「院長先生……お夕食をお持ち致しました……」

ミンチンの声「お入り……」

28

同・院長室

入って来るセーラとベッキー——テーブルに食事の盆

を並べる。

ミンチン「（ジロリ）ベッキー……」

ベッキー「は、はい、院長先生……」

ミンチン「お前には、明日から、ヒマをやる事にしました」

ベッキー「ええッ！」

愕然となるベッキーと、セーラ――

ベッキー「そ、そんな……お願いです、院長先生……私をクビになさらないで下さいまし……」

笑うミンチン――

ミンチン「馬鹿な子だね、お前は……生徒たちと同じように、お前にも夏休みをさせてあげようと云うんです」

ベッキー「ええッ……」

愕然と、セーラと顔を見合せる――

ミンチン「但し、里帰りの間の給料は、当然、払ってやる訳には参りませんから、そのつもりでね」

ベッキー「は、はい、院長先生……」
ミンチン「それから、セーラ……」
セーラ「は、はい……」
ミンチン「お前もどこかへやってしまいたい所だけど、帰る所もないのだから、止むを得ないでしょう……これまで通り、この学院に残って働くのです」
セーラ「はい、院長先生……」
ミンチン「判ったら、二人とも、退ってよろしい」
心配そうにセーラを見るベッキー。

29 同・廊下（夜）

出て来るセーラ、ベッキーの手をとる。
セーラ「ベッキー……よかったわね、夏休みに帰れる事になって……」
ベッキー「お、お嬢様……！」

その時、アメリアが夏帽子を手に出て来る――

アメリア「あ、ベッキー……これ、私の古い帽子なんだけど、院長先生があなたに、お里帰りにかぶって帰るようにですって……」

ベッキー「えっ……この帽子を……私、頂けるんですか」

アメリア「そうよ」

ベッキー「うわァ……あ、有難うございます、アメリア先生……私、前々からこう云う帽子が欲しくてたまらなかったんです！」

アメリア「まあ、よかったわね……」

30 同・地下の作業場

帽子を手に嬉んで帰って来るベッキーと、セーラ――

ベッキー「わあ……素敵ィ……お嬢様、これこうやって、かぶるんでしょうか」

帽子をかぶってみせる。

セーラ「（微笑）あ、もう少し、こうよ」

セーラ、直してやる

ベッキー「わあ、私に、似合うでしょうか」

セーラ「（微笑）ええ、とてもよく似合うわ」

ベッキー「やったァ！」

躍り上った途端――はっと、セーラの立場に気づき、

急いで、帽子をとる。

ベッキー「お、お嬢様……」

セーラ「どうしたの、ベッキー？」

ベッキー「お、お許し下さいまし……私……私、ずっとお嬢様と、ここで夏を送る心算でいたんでございます……」

セーラ「（微笑）いいのよ、ベッキー、私の事は気にしないで……おうちの人だって、あなたが帰れば、きっと大喜びなさる筈だわ」

ベッキー「そ、それはそうですけど……お嬢様を置いて、私だけ、うちへ帰るなんて……お嬢様に申訳けなくて……」

セーラ「心配しないで……大丈夫、私ひとりでなんとかやれるわ……さ、それより、帰りの支度をしておかなくては……」

ベッキー「は、はい、お嬢様……」

31 同・屋根の上（夜）

同・屋根の上（夜）遠く、汽笛を鳴らして夜汽車が高架を通って行くのが見える。

32 同・ベッキーの部屋（夜）

ベッド脇の床に――置かれているベッキーの旅行つづら。

× × ×

ベッドに、微笑を浮べて眠っているベッキー——その胸許に、先刻の夏帽子が置かれている。

33 同・屋根裏部屋（夜）

じっと父母の写真をみつめているセーラ。

セーラのN「明日から、たった一人になってしまう私……でもその淋しさを隠して、私は、ベッキーの里帰りを出来る限り応援してあげようと、そう心に決めたのでした……」

壁穴の前で、怪訝に見上げているメルの一家——

（第二十八話　終）